
意識術師の時間流動

織宮 征

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意識術師の時間流動

【Nコード】

N5645Z

【作者名】

織宮征

【あらすじ】

人間に備わっている【意識】という機能を向上させて異能を発揮する者 意識術師。現在ではフリーで、非日常に関する何でも屋を請け負っている皇景一は、四泉一族という意識術師の一族からある依頼を受ける。春先のライトノベル新人賞に応募予定の作品です。

始まりの夜

その町での初仕事は、これまでの仕事と照らし合わせると楽なものだと思えた。

都心から少しばかり離れたとある町。都市開発が発展しているわけではなく、かと言って田舎じみた田園地帯が広がっているわけでもない。どこにでもある普遍的な風景が見受けられる町だ。

それが、皇景一（みぎやうけいち）がこの町に抱いた第一印象だった。何の面白味も感じられない……しかし普遍的だからこそ暮らし易そうな町とも思えた。

深夜十一時。オフィス街の高層ビル屋上、フェンスの前に寂然と佇み、彼は夜の町を俯瞰する。高所に居る為か吹き抜ける風は強く、うなじで束ねられた長い黒髪がなびく。

男性にしては肌が白く女性の肌質に近い。身長は百七十センチ後半と言ったところか。白色のシャツの上から黒いロングコートを身に纏っている。

十七歳という年齢にしてはその顔に感情が足りないように見えた。端的に言えば無表情だった。と言っても、それは彼の歩んできた人生から生じたものである。

毅然で、酷薄とした無表情は他人に何の影響も与えない。事実、それは彼が所属していた組織の人々も認めていたものだ。

「近いな」

景一は消えそうな声とも取れる呟きを漏らした。

依頼人であるあの一族の当主の話が嘘偽りのないものだとしたら、今頃、一族の分家の者もこの周辺を巡回しているだろう。

そして、それを完全な事実にするには、分家の者が遭遇し、それをこの目で確かめる他ない。

しかし、あの当主は「これ以上の犠牲を出すわけにはいかない」とも言っていた。その為に自分に依頼をしたようなものだ。ここで

契約を破るわけにもいかない。

元より、この仕事は自分の実力を買つての依頼なのだ。無様に失敗するわけにもいかないが、あの話が真実なのか確かめたいという好奇心も己が内にある。

（だが、考えている暇はないな）

そう考えている矢先、その気配を察知した。町を俯瞰する彼の眼にはすでにそれは顕現を始めていたのだ。

「……嘘じゃなかったのか」

多少の動揺を自覚しながら、景一はその場所を視た。この高層ビルから五十メートルほど離れた場所にいるのはそれと、慌てふためきながらも術を行使しようとしている一族の分家筋の者だった。

結界を張っているところを鑑みれば、まだ一般人への配慮を忘れていないと窺えるが……

（……疑問は残るが、まずはあれの始末、だな）

この矛盾については翌日にでも当主に相談すれば良いだろう。そう判断した景一は、高さ二メートルはある金網状のフェンスを乗り越え、その場から地上に向かって高く跳躍した。

「くそ、どうなってやがる!？」

黒い殺気を見に纏っている四泉一族しせんの分家筋の人間 四泉貴人しせんたかひと

は、ハメートル前方に在るそれから眼中に収めながら、荒ぶった声を漏らした。

この現状から逃避したくなりながらも、彼は四泉一族の人間としてその考えを即座に捨て去る。

自分と同じく町の巡回を行っていた仲間の術者はすでに死んでしまった。結界を張った術者もその内に入っている。

結論で言えば、術者が死んでしまった以上徐々に結界の効力は解けていき、残り三分ほどで消滅してしまうという状況だった。

故に、その三分間でこの化け物を殺さなければ一般人に被害が及ぶ。

貴人は、この世の生物とは思えない『影』から目を逸らしたくなるが、そうはしなかった。目を逸らしたら最後、傍らに転がっている二人のように一瞬で影の一部に斬り殺されてしまうだろう。

前方に佇む黒い霧が固体化したような『影』の正体は解っている。これは滅び去った妖魔、邪霊の残滓がその精神を現世に残し、他の残滓と結合を果たして顕現を行う『まてきいしきたい魔的意識体』だ。

魔的意識体自体は、一般的な術者の部類に属する者ならば殺すことは可能とされている。しかし、この魔的意識体はどこかおかしい。当主から任務を授かった時に聞いたように、普通の魔的意識体とは何かが異なっている。

「くそ！」

貴人は焦りを覚えながらも、自分の殺気を増幅していく。文字通り、この魔的意識体を殺すという意志を脳内において向上させた。

先ほどまで纏っていた黒い殺気が、徐々に変色を成していく。仲間の二人が殺られたという憎悪を正しい感情として意識し、攻撃概念として成立させる。

「意識変革 レベル3！」

この瞬間、貴人の『意識』が常人の三倍に達した。意識という機能を向上させる自己暗示。この手順を踏んだことによって、全ての感覚機能が最大限に研ぎ澄まされ、己が内界に宿す禁忌にちから触れることが可能となった。

至高となった意識は、兼ねて四泉一族の人間が宿す異能との同調を果たす。

貴人の体を纏っていた黒色の殺気が、その色彩を紅色へと変色を成した。

古より伝わる『いしきじゆつし意識術師』の一族、四泉一族の宿す『いしきじゆつ意識術』それは殺気の具現化にある。喜怒哀楽という感情を基板とし、『脳内で【意識】した怒りの感情を攻撃手段へと昇華させる技』であった。

この『さいきいしきじゆつ殺気意識術』の中でも、赤の殺気はれっきとした上位の退

魔概念として成り立っている。

故に、魔的意識体が赤の殺気を食らって消滅を免れることなど叶わない、と貴人は確信した。

貴人は右手の掌を魔的意識体に向け、体に纏う赤の殺気を開放した。皮肉にも、仲間二人が殺られたことによる殺気の向上を利用して。

赤の殺気は右手に集う過程において凝縮し、摂氏一〇〇〇度という大熱量の内包を得て放たれたものだ。それは、四泉一族の『殺気色彩論』しきさいろんにおいて、赤へと昇華した殺気は火の元素を宿することになるが故。

魔的意識体と呼ばれる黒い『影』は、赤い殺気にあっけなく呑み込まれた。

この時点で、本来ならば魔的意識体が消滅するのが是となる。元より、意識術というのは古来から魔的意識体を滅ぼす為に編み出された秘術であるからだ。

故に、四泉一族の上位概念 必殺とも言える赤の殺気が勝利の一撃となるのは自然の摂理といっても過言ではなかった。

「な」

だからこそ、上擦った声を上げた貴人の狼狽は本物だった。

黒い影 魔的意識体と呼ばれる存在は滅びていなかった。いや、正確に言うならば……

「俺の殺気を、喰ってる、のか……？」

分かる。自分が作り出して放った攻撃だからこそ理解できる。この魔的意識体は赤の殺気を吸収し、我が物にしている。

その証拠が、今現在の魔的意識体を保っている存在的な色だ。存在を象っていた黒い影は燃えるような赤へと変色し、まるで大型の火の玉を連想させる形状になっていた。

「、」

魔的意識体が呪いめいた音を発した。ノイズが掛かったような雑音だった。その音が余韻を残さずに風邪に溶けた瞬間、魔的意識体

は影の中心部位から大熱量の炎を放った。

「ひ　っ！」

吸収した火の元素が、逆に貴人へと襲いかかる。

貴人が放ったような低範囲の攻撃ではなく、幅十メートルはある攻撃。それはまさしく火の海だ。食らったら跡形もなく溶解するであろう魔の炎に、貴人は為す術もなく呑み込まれようとしていた。

「世界の意識よ、その理を変えろ」

しかし、その時。この局面に侵入を果たした『一つの意識』によって事態は大転換を成す。

誰かが唄うようにそう呟いたのだ。女性とも、男性の声質にも取れる中性的な音色こえだった。

瞬間、貴人に襲いかかった火の海がその勢いを止めた。

否　これは『止めた』や『静めた』などという表現は全く適切ではない。

時間が殺され、世界の理が変化したのだ。

「結界が維持されていたから可能だった」

貴人の傍らには、いつの間にか黒いロングコートさまを羽織った少年

一族の当主が雇った皇景一が超然とした様で佇立していた。

「消失まで残り一分二十三秒の『意識結界』いしきけつかい。その所有権を奪った。見た限り……普通の魔的意識体じゃなさそうだな」

漆黒の瞳が魔的意識体と中空で停止している炎に向けられる。

その、この状況で明瞭なまでに平静を保っている景一を、貴人は憎むような目で睨めあげる。

「なに安心しきってんだ！　仲間が二人殺られたんだぞ！？　雇われの身ならもつと早く来やがれ！」

半ば以上本気で涙目になりながら、貴人は声を荒げた。

その言葉に、景一は冷めた視線を背後に向けた。

「魔的意識体が存在の一部を刃に変えて、攻撃を回避できずに斬り殺されのか。それは不運だったな。だが……」

もう興味がなくなつたと言わんばかりに前方に向き直り、景一はこう断じた。

「弱かつたから死んだ。それだけのことだ」

「あ、あんた　！」

「俺の仕事はあんたらを守ることじゃない。『犯人』の始末だ。だからあんたらと慣れ合うつもりは毛頭ない。それと、あんたとの話を長引かせるつもりもない」

景一が強引に奪ったこの意識結界の種類は、ただの人払いの結界だ。所有権が自分に渡ったが故に時間の停滞を行えたが、こんなチャナ結界では魔的意識体がいる範囲の停滞がやつとなのだ。

「……だが、死んだ術者が残した一分二十三秒を無駄にはしない。とりあえず、殺した時間を再開させるぞ」

景一は右手を肩口辺りまで上げて、指を鳴らした。

同時に、魔的意識体の放った炎が動き始めた。以後の一秒で、景一と貴人に覆い被さるように炎が接近した。炎に吞まれて絶命するまで、残り〇・五秒といったところか。

しかし。

「意識変革、レベル3」

景一はその結末を否定し、結果を逆転させた。

「意識結界の所有権を奪取し、時間の流動変化を開始」

覆い被さった炎が、ビデオテープで巻き戻されるように後退を始める。

「有る筈だった結果を【意識】し、流動する時を逆転する」

瞬間、轟！！という轟音と共に、魔的意識体は自身の放った炎に呑み込まれ、意識の消失……絶命へと至った。

「な……これは、一体……」

その一連の光景を目の当たりにした貴人は、現実を直視できず、

だらしなく口を開けて啞然としていた。

「意識結界が解けるまで、残り三十秒といったところか」

対照的に、景一はこの結果を当然の幕引きだと受容し、踵を翻す。「明日はあんたらの屋敷に邪魔するつもりだ。早く帰って当主に伝えろ。もつと使えるヤツを用意しろってな」

神経を逆なでするような台詞だが、一人残された貴人は呆然としながら無意識に頷いていた。

（これが　　）

そう、これが皇景一の実力。

先ほどの流れは、もはや戦いではない。ただの一方的な勝利に過ぎないと実感し、貴人は確かな恐怖と戦慄を覚えた。

そう、これが。

現存する意識術師を束ねる組織の元最高幹部　【時の調律者】ちのつりしや
と呼ばれていた者の力の一片であった。

四泉碧海

四泉一族は、古より意識術を行使できる素質がある乳児が生まれ
てくる。才能という要素を除き、その確率は一族が始まった二千年
前より一〇〇%を維持してきた。

四泉一族だけが用いる唯一無二の意識術 『殺気意識術』を行
使する為、殺気という感情を覚え、その力を御しきるだけの自制心
を己が内で成立させる。それが四泉一族で生まれた者の責務と言え
た。

故に、その殺気意識術という非現実的な異能^{ちから}を行使でき得る四泉
一族は日常世界を守護する役目をも担っていた。

そして、つい最近になって、その役目を存分に発揮する事態が発
生した。

それが、この町における魔的意識体の異常なまでの大量発生、そ
して生半可な意識術師では滅することが不可能という現実であった。
しかし、その原因と呼べるものが自分達の一族に有るということ
を、彼らはまだ知らなかった。

その日の朝、四泉一族の者が暮らす屋敷の内部 大きな庭園と
なっている場所に、その少女はいた。

小池の手前に腰を下ろしている、巫女装束を違和感なく身に纏っ
た少女だった。肩より少し下辺りまで伸びている黒絹のような直毛
が風で静かになびく。顔の造型もこれまた出来すぎていて、日本中
の女性が羨むようなきめ細やか純白の肌に小さな顔立ち。鼻筋もし
っかりと通っている。栗鼠のように大きな瞳は目尻を垂らして細め
られ、桜色の口元には薄い微笑を刻んでいた。身長は女性の平均値
より少し高めで百六十センチはあるだろう。

すらりと伸びた長く細い両脚を池の水部に浸けて、冷めた水温を
肌で感じながら楽しそうにちゃぷちゃぷと動かしていた。

これが四泉一族の直系、四泉碧海の朝の恒例行事であつた。しせんあのみ

自然の趣をその身で直に感じ取り、心身ともに清らかな気持ちにさせる。ここ最近では物騒な事件が連発しているが故か、こうして落ち着いた時間を設けるのも一苦労だつた。

不意に聞こえてきたチチチ、という動物の小さな囁りに俊敏な反応を示した碧海は、ゆっくりと顔を上げる。見ると、小池の反対側に植えられている樹木の小枝で一匹の小鳥が羽を休めていた。

「おいで」

胸の近くまで右手を持ち上げ、細く白い人差し指をピンと伸ばした。碧海の呟きに反応した小鳥は羽を羽ばたかせ、放物線を描きながら彼女の指に足を乗せる。

そろそろ成長期に突入するであろう小鳥の丸い目を見つめ、碧海は「そう」と柔和な笑みを浮かべる。

「親鳥とはぐれちゃったのね。じゃあ、私も一緒に捜してあげる」

小鳥にそう言った碧海は、静かに双眸を閉じて意識変革を始めた。ここで言う意識変革とは、意識術を行使する為のものではない。

確かに己が内にある意識術ちからを使役するには意識変革の起動が必要不可欠とされるが、それはあくまで『戦闘用の意識変革』である。

対して今、碧海が行なっている意識変革は『日常で頻繁に使用する意識』つまり身体感覚器に対する意識レベルの向上だつた。

碧海の意識は、すでに至高体験レベルにまで達していた。聴覚に全意識を集中させ、この周辺に存在する鳥類の『鳴き声』の本質を聞き取り、生態としての種類を選別し、親鳥と思われる呼び声を感じ取る。

この時、常人を遥かに超越した聴覚によって、碧海は周辺に居る鳥類の位置を完璧に鳥瞰していた。

「……見つけた」

再びゆっくりと両眼を開き、自分の座っている向きから西に首を向ける。

そして、人差し指に佇立している小鳥に伝え事を行った。

「ここから西南、四十五メートルの座標にあなたのお母さんがいるわ。自分で飛んで行けるよね？」

可愛らしく小首を傾げ、そう訊く碧海に　　小鳥は小さく頷いたように見えた。

小鳥は羽を羽ばたかせ、碧海の指定した場所に向かって飛翔していった。

「ばいばい」

小鳥の乗っていた右手を振りながら、碧海は笑顔で別れを告げた。
「さて」

と、碧海は水部に沈めていた両脚を池の外に出して、隣に置いておいた白地のタオルで水気を拭き取り、下駄を履く。

「そろそろかしら」

自分の体内時計が狂っていないければ、もうじきこの屋敷に宗主の雇い人が姿を現す筈だ。当主とその付き人の話を傍聴した辺り、自分と同じ年の少年であるとか。

その、『非日常に属する同い年の少年』という辺りに碧海は興味を持っていた。しかしそれは通っている高校が女子高であるから、一族の人間の中に近い歳の子供がいないから、という意味合いでの心境ではない。

その少年は、世界に存在する全ての意識術師を束ねる組織　意識術師達の総本部と呼ばれる『創世の塔』において、若干十六歳で最高幹部に抜擢された過去を持っているらしい。今では非日常に関する事件の解決を請け負う、フリーの何でも屋を営んでいるようだ。
しかし事実、碧海が注目しているのは創世の塔における最高幹部であったことではなく、その後の話……なぜ、最高の地位を与えられたにも拘らず、フリーの何でも屋など営むようになったのかであった。

その、普通の意識術師ならば最高の名誉に値する人生を自ら捨てた理由。それが気になって仕方がなかった。

「……まあ、それは私も同じか」

自嘲気味に薄い笑みを浮かべながら、碧海は屋敷の縁側まで足を運ぶ。左右に重心がブレない、体の中心線を保った完璧と言える歩法だった。

縁側で脱いだ下駄を綺麗に揃え、裸足のまま、木造の廊下を歩き始める。それなりに年季の入った屋敷なのか、歩を進める度に床が小さく悲鳴を上げた。

しかし、それも愛嬌があって良いものだと思っている辺り、碧海はこの生まれ育った屋敷を好きでいるようだ。

昨晚、碧海が四泉一族の現宗主から命を受けたのは深夜二時を回った頃だった。何でも、「明日の午前八時丁度、私の自室に來なさい。会わせたい者がいる」とのことだった。

その日の夜は、街に出没した魔的意識体の抹殺任務で碧海は心身ともにそれなりの疲労を被っていた。故に昨夜、宗主から聞かされた話は今日の朝になるまで忘失状態だったのだが　なるほど、考えてみれば、自分と会わせる者など付き人と話していた皇景一という男に違いないだろう。

宗主が何を考えているのかまだ完璧に理解してはいないが、あの父親のことだ。良からぬ計画を企てても何ら不思議ではない。

「
そうこう思考を走らせている内に、宗主　父親の自室の前に辿り着いていた。明らかに他の部屋とは違う高価たかそうな襖を扱っており、その向こう側からは源三の声と、男性とも女性のものとも取れる中性的な声が聞こえる。

（……もう来てるのかな？）

と、不意に思った疑問を口には出さず、碧海は姿勢を正して、襖の奥に呼びかけた。

「碧海です。宗主、お入りしてもよろしいでしょうか？」

「入りなさい」

一拍の間の後、低い声でそう許可が下った。

碧海は「失礼します」と控えめな声で言い、両手を取っ手に掛けて、静かに襖を開けた。

そこには、この四泉一族を実質的に支配している実の父親 四^し泉源三と、黒いロングコートを身に纏い、胡坐を掻きながら無愛想な表情を浮かべている少年の姿があつた。

こうして、二人は邂逅^{であ}つた。

努力で力を極めた少年と、才能で力を極めた少女の初対面であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5645z/>

意識術師の時間流動

2011年12月20日17時48分発行